

## 久保先生へ・お別れの辞

経営学部 ホスピタリティ・マネジメント学科 教授 原 仁 司

久保先生。淋しくなります。久保先生、いや、「久保さん」とお呼びしてもよろしいでしょうか。こんな風に私が言うてしまうのを、久保先生をよく知る人なら、首肯されるのではないのでしょうか。ご本人も、おそらく例の微苦笑をしながら、照れるようにしてお許しくださると思います。ですので、以下「久保さん」でお話しさせていただきます。

久保さんと初めてお会いしたのは、今から約二十年前。教養部が解体し分属が行われてのちの経営学部カリキュラム委員会のとき。とは言え当時は、久保さんは二瓶学部長のもとで教務主任をされていたので、私が遠目におし戴いた、拝謁したという感じに近いと思います。いま思えばまことに平和な時代でありました。しかしながら、私にとって久保さんの第一印象は、じつは「怖い人」でした。今の若手の先生がたにはちょっと想像がつかないかもしれないですね。久保さんのお付き合いは私が教養系の教員であったことも与っていたのですが、最初はなかなか話すらまともにできない関係だったということを憶えています。これは私が経営学部に分属するや、すぐに酒席のお誘いをいただいた上村先生や小野先生（お二人とも信じられないほどの酒豪で、特に小野先生にはお酒でお世話になりました）とは異なり、そもそも久保さんは世俗的な関心をもって人とお付き合いなされなかつたのではないかと。改めてそのように感じる次第です。

だから久保さんとお話するようになったのは、じつは学部の仕事を一緒にするようになってからのこと、ここ十年くらいの間のことであつたように思います。学部の仕事をしていると、ついついボヤキやグチが出る。当時、三門教務主任から（何の因果か三門先生は今も教務主任をされています）「ボヤキの久保、グチの原」などという意地悪なニックネーム？を並んで付けられたりしましたが、前者のほうがまだ幾分マシでは無いかと一人密かに憤慨しておりました。

そんなこともあって、カリキュラム委員会では数年後、久保さんもヒラ委員になり、ヒラ同士で隣に座ったりしたこともあり、少しずつですがお話しするようになりました。

ある時、仕事帰りに三鷹の沖縄料理の店（今はありません）で、沖縄焼酎をしたたか呑んだことが原因で久保さんはしばらく酒をひかえることになってしまいました。それも2年後くらいには解禁となり、再びご一緒させていただく機会が増えて行きました。

呑んで我々が何を話すのかというと、そこが他の先生がたと話すときとやや違うところだと思います。何が違うかと言うと、同僚の先生がたと話すとき、たいていは学内・学部内行政の話か先生同士の噂話になることが多いですが、そういう話は、もちろん必要があれば我々もいたします

が、その話が決して軸にはならない。そこが久保さんと酒席を共にして楽しいところ、勉強になるところでした。これは私の専門領域に近い人と話していてもやっぱり噂話や学部内行政の話ばかりになることが多く、私は齢を重ねるにしたがって次第にそういう身近な職場の話題を嫌うようになり、ある別の先生には「もうそういう先生たちの話は止そうよ。」とまで言ったこともあります。なかなかそうなってくれないのが人の世の常ということかもしれません。

久保さんの専門である財務や金融、投資の話ではなく(そんな話を文学畑の私ができるはずもなく)、現代哲学や思想、言語学、生物学、遺伝学、天文学、化学、AI、宗教、美術など涯はJ-POPSから洋楽に至るまで、ほとんど無節操とも言えるほどに多様なジャンルの話をさせていただきました。うかつにも、途中で気付いたことなのですが、久保さんはもともと理系の人なのです。京都産業大学では理学部数学科、京都大学では農学部に入り農学士の資格を、筑波大学大学院では社会工学を学んでおられた。私ももともと実家は両親兄弟みな理系で、文系は私だけ。そして、数学は兄の影響で常に2年先の教科書を勉強していましたから大学受験を数学で受けることも可能でした。久保さんの話の展開のし方、させ方に、どこかしら親近感をおぼえたのはそのせいであつたのだと後に得心いたしました。

どのような話し方なのかと言いますと、それは、一言で言えば「論理の飛躍を楽しむ」話し方でした。文系の人(先生がた)と話していると、論理の飛躍を嫌がる人が結構多いことに気づかされます。手堅く足元を踏み固めないと跳躍できないのです。対して理系の頭は逆に飛躍こそが知を構築し再創造するもののように感じます。枝から枝へ飛び移る小鳥のように知の跳躍を行う。とは言い、私のいかにもつたないチャランポランな話を、久保さんはいつも寛容かつ積極的に受けとめてくださいましたし、ご自分でも話をしながら様々な空想に頭をゆだねて知的跳躍を試みておられたのではないのでしょうか。そんなときあの微笑みが、またいつになく含羞をたたえていたことを、私は決して見逃しませんでした。

ある日のこと。久保さんが珍しく私に提案をなさいました。(このときもまた、遠慮するようにハニカムのように、だったことを憶えています)。何を提案されたかと言いますと、私が当時企画していた「Asia 写真銀河」という文化イベントに、著名な写真家である竹沢うるまさん(ナショナルジオグラフィック写真賞グランプリ)を招かないか、というご提案でした。竹沢さんの写真は無論素晴らしく、奥様の仕事の関係で最近お知りになったとのこと。一も二もなく即座にその話に飛びついた私は、すぐに久保さんと一緒に原宿にある竹沢さんのオフィスにまで押しかけなんとか出演をしてもらう手筈になりましたが、その喜びが大きかったからでしょうか。なぜかこのとき原宿で祝杯をあげたかどうかの記憶が定かではありません。今度、昔話にあのときはどうしたのか、小声でこっそり聞かせてもらおうと思っています。

ところで、じつはこのあとが大変でした。竹沢さんに来てもらうのは良いのですが、オーディエンス(観客)が少なすぎたらどうしよう。一番客が入ったときでもサクラを除けば実数100人行くか行かないかでしたから(じつはこの企画には、紫綬褒章の大石芳野さんや木村伊兵衛賞の長島有里枝さん、土門拳賞の今森光彦さんら日本でも有数の写真家を招いて来ましたが、宣伝の

やり方が下手で、いつも観客が少なすぎていました)、もし観客が少なすぎると恥をかかせてしまうことになる。で、どうしたのかと言いますと、今ならSNSで拡散などを考えたでしょうが、我々二人はその方面には明るくないずぶのアナログ人間でしたので、案内の宣伝ビラを作って近隣の住宅に一軒一軒配って回ることを画策しました。2016年の6月4日が当日だったので、5月のうららかというよりはかなり暑すぎる炎天時、大学周辺の住宅を二人のおっさんがのどかにめぐり歩く姿はかなり滑稽だったに相違ありません。いまから思うと、そんなことまで大先輩にさせてしまって大変申し訳なかったという気持ちにもなります。でも、その付き合いの良さこそが久保さんだと、失礼ながら今もそう思っています。(確か、このときは小金井方面のお好み焼き屋に立ち寄ったと記憶しています。高いけど美味しいんですよね、ここ。)

久保さんは、まこと含羞の人ではないかと思います。さらに礼儀を知り、理智を知る人でもあります。久保さんと一緒に話をしているいつも思うのは、人の悪口が極端に少ないことです。むしろ人間なのだから多少することはあっても、長続きはいたしません。そして悪口を言ったあとは、いつもどこか寂しげな顔になります。ジョセフ・コンラッド言うところの「自制心(reflection)」が常人の何倍も備わっている人。奄美出身の久保さんの風貌からは、いつも厳粛な古代の香りが上品に、優しくただよって来ます。久保さん。いつまでもお元気で。心からそう願っています。

2020年10月吉日